

金野弘の観光ポスターについて

美術工芸資料館 技術補佐員 中川可奈子

美術工芸資料館の収蔵品には、作家自身の厚意により寄贈された貴重な資料も多く含まれている。

金野弘（1915・1985）は秋田県に生まれ、京都工芸繊維大学の前身校のひとつである京都高等工芸学校図案科を1938年に卒業後、大阪高島屋宣伝部にて活躍する一方、国鉄（大阪鉄道管理局）や関西汽船などのために、長年にわたり観光ポスターを制作したグラフィックデザイナーである。1967年から1975年まで京都工芸繊維大学工芸学部意匠工芸学科で非常勤講師を務め、1983年には自作ポスター約200点を美術工芸資料館に寄贈している。今回は、展覧会「旅するところをのせた金野弘の観光ポスター」（会期：2026年6月1日～7月11日）の開催にあわせて、これらの資料を紹介したい。

金野弘が学生の頃、学校正門前に古本屋「ワキヤ書房」が移転してきた。店主の脇清吉（1902・1966）は、「プレスアルト研究会」を創設し、広告印刷物の実物を収録した解説冊子『プレスアルト』を1937年より刊行した。この冊子には、印刷物の批評や解説に加えて、デザイナー名や印刷技法、用紙、印刷所といった詳細な情報が記載されており、当時のデザイナーや印刷文化を知ることができると重要な資料となっている。当時、京都高等工芸学校の教授であった本野精吾（1882・1944）や霜鳥之彦（1884・1982）、向井寛三郎（1889・1958）も顧問として批評や執筆を行っていた。学生であった金野弘もまた、素朴で飾らない風情のようなものに惹かれて、この古本屋に通ったそうだ。

『プレスアルト』第13集（1938年1月）には、1937年12月にプレスアルト研究会主催で開催された「京都高等工芸学生が創る多く、事前に座席を予約できるサービス「発車着席券」の発売開始を告知するポスター（図6）や時刻改正に合わせて発行された「ダイヤル特急」あさしお」のポスター（図7）など、鉄道に関するポスターも見られる。関西汽船のために制作されたポスター（図8）では、温泉につかりながら船旅を思い浮かべる人物が描かれており、ポスターの前に立つ人々は、そこから新たな旅へと思いを巡らせたのではないだろうか。長年にわたる国鉄観光ポスター制作に対して、1970年に大阪広告協会サントリイ奨励賞を受賞した。また1979年にはデザイン功労により大阪府知事賞を、1980年にはデザイン文化功労により大阪市民

小型印刷物創作図案展を中心に商美を聞く座談会」の様子が掲載されている。この場で、大阪高島屋宣伝部に在籍していた今竹七郎（1905・2000）や太湖汽船会社の金井利夫から才能を高く評価された金野弘は、今竹七郎と脇清吉の推薦により「プレスアルト」第25集（1939年3月）の編集を担当した。その後も冊子の表紙デザインや自身の手がけた印刷物の提供などを行い、その関係は継続していった。

1941年に大阪高島屋宣伝部へ入社し、1978年まで同社の商業デザイナーに携わった（1946年以降は嘱託）。1952年に誕生した高島屋初代「薔薇の包装紙」は金野弘によるデザインである。同社での活動により、1957年にポスター広告電通賞、1960年に朝日広告賞百貨店部門賞を受賞した。また1951年より日本宣伝美術会（日宣美）の創立会員、審査員としても活動したほか、1963年には「H・KONNO デザイン室」を開設し、フリーランスデザイナーとして活躍の場を広げた。

そんな金野弘の仕事を語るうえで欠かせないのが観光ポスターである。日本国有鉄道と日本観光協会共催の観光ポスターコンクール入賞をきっかけに、1954年から国鉄（大阪鉄道管理局）のポスター制作を依頼されるようになった。当時の国鉄ポスターは、公共的な情報伝達を目的とした掲示物であり、毛筆による楷書体の文字が黒、赤、青などの色で1色刷りや2色刷りによって印刷された簡素なものであった。こうした状況のなかで、金野弘は国鉄ポスターの新しいあり方を検討する必要があると考えた。まず、デザイン上の工夫が試みられた。1955年に発行された大阪鉄道管理局のポスター（「まずまず便利になった北陸観光準急ゆのくに号」（図1）には、運行情報が明示されるとともに、温泉マークの付いた

表彰をそれぞれ受賞している。

金野弘は京都高等工芸学校でデザインを学び、印刷物の奥深さや魅力に触れた人物である。松ヶ崎時代には仲間にもまれながら、童顔に丸眼鏡をかけアコーディオンを弾いていたことや、デザイナーとして活躍後も本とおもちゃに囲まれた部屋の片隅で制作に取り組んでいたことなどが伝えられている。こうしたエピソードからは、彼の温かく遊び心に満ちた人柄がうかがえる。

金野弘の観光ポスターは単なる情報伝達にとどまらず、「旅するところ」をのせ、人々を旅へと誘う存在であったといえる。ぜひ、この機会

を抱を持ち、嬉しそうな表情を浮かべたキャラクターが描かれている。赤と黒の2色刷りでありながら、現代的な文字とイラストレーションによって、視覚的なわかりやすさに加えて親しみやすさを持たせている。

さらに金野弘は、国鉄ポスターのあり方について次のように述べている。「業務上の機能をはたしながらさらに加えて何かを強く訴える手段を考えなければならぬ」と思われた。なにを加えるかというところは「旅情」ではないかと考えた。人を旅に誘いだす情緒のようなものを画面に参加させることが、業務一点ばりの味けない国鉄のポスターに新しい風を吹きこむことになるのではないだろうか。（金野弘「国鉄のポスター」『デザイン理論』13号、意匠学会、1974年、43ページ）

旅情とは、旅の中で感じる特別な気持ちのことである。見知らぬ土地への期待や、美しい景色に感動する心、どこか切なさや寂しさを感じる瞬間など、さまざまな感情が重なり合った、しみじみとした心情を意味する。このような考えをもとに制作されたのが、『爽やかな秋の風 秋の音：週末は温泉一泊の旅』（図2）である。画面いっぱい描かれているのは、ススキ畑を走る機関車の姿であり、旅情を感じさせる表現となっている。これ以降、この考え方は変わらず、数多くの観光ポスターが制作された。春の花咲く風景が描かれた『いでゆの里は花ざかり』（図3）や、夏の山岳風景が描かれた『日本の涼線 アルプス・高原へ』登山列車』（図4）など、旅の風景はポスターの主要な題材となっている。これらの作品では、やや抽象化された風景が描き版による色面分割によって表現されており、中間色を用いた柔らかな色彩がポスターの魅力を生み出している。そのほかに、地域の特産品や季節行事に関するポスター（図5）なども

に金野弘の観光ポスターをご覧いただけると幸いです。

参考文献

- ・金野弘「国鉄のポスター」『デザイン理論』13号、意匠学会、1974年
- ・「金野弘のポスターアート」を編む会
- ・『年々彩々 金野弘のポスターアート』1978年
- ・「碑 脇清吉の人と生活」脇清吉の碑をつくる会、1967年
- ・沢田トヨ「あるいしぶみの声」皆美社、1977年
- ・嶋田厚、津金澤聡廣編「復刻版「プレスアルト」」柏書房、1996年
- ・西村美香「プレスアルト研究会にみる広告物収集とその意義について」『デザイン理論』34号、意匠学会、1995年



図1 金野弘（「まずまず便利になった北陸観光準急ゆのくに号」5月中旬刊行）1955 大阪鉄道管理局 AN.367201



図2 金野弘（「爽やかな秋の風 秋の音：週末は温泉一泊の旅」1956 大阪鉄道管理局 AN.343640



図3 金野弘（「いでゆの里は花ざかり」グループ旅行のイラスト「花のやぶ」の史蹟めぐり）1962 大阪鉄道管理局 AN.343607



図4 金野弘（日本の涼線 アルプス・高原へ一登山列車 7月16日から増発）1966 大阪鉄道管理局 AN.343626



図5 金野弘（「初秋の工芸院展」9月10日発売特選10コース!! 秋の味覚祭り、立山・黒部アルペンルート・富士箱根・美作三湯・南紀の海）1973 国鉄大阪 AN.343641



図6 金野弘（「あなたのお席です！」11月23日から年末・年始のご帰郷旅行に「かならず座れる」発車着席券「こしも郵便で」お席の予約を承ります）1968 大阪鉄道管理局 AN.367235



図7 金野弘（「より便利により快適に47年10月2日時刻改正 京都から山陰直行の特急ルート開設 特急あさしお号 1日4往復!!」1972 国鉄大阪 AN.343659



図8 金野弘（「新春の温泉プラン」別特航路でゆくとくいなオールド旅行 道後温泉へ）1963 関西汽船 AN.367310